

① 草原に木が点々と生えているときに、われわれは全体を見ることのできるから、そこ全体が環境、つまり木の点々と生えた、草原全体を環境と見る。しかし、チョウにとっては、草原全体がその世界ではない。アゲハチョウにとっては、草原自体はその世界の中には存在しておらず、その草原に生えた、日の当たっている木だけが世界である。モンシロチョウにとっては木は存在していないに等しく、大事なのは日の当たっている草原である。同じひとつの場所を見たときに、人間とモンシロチョウとアゲハチョウとでは、世界はまったく違っている。ひとつの「環境」という言葉でくくってしまうてはならないし、それを客観的環境と呼ぶことは彼らにとっては意味がない。

② 「環世界」という言葉は昔は「環境世界」と訳されていた。これはユクスキウルが客観的な意味での環境というのを否定して、主体の動物が積極的に構築している世界が問題だと言ったことを考えてみると、環世界という言葉は、彼の言ったことを否定した訳語になる。それではあまり意味がないと思ったので、ほくは環世界という言葉を提唱している。とにかく大切なのはこの環世界であって、一般的な環境が問題なのではない。

③ たえばわれわれが「良い環境」と言いつつ、それは清潔で安全で静かで、適当に木の緑があり、しかし「雑草」は生い茂っていないところを指すことが多い。しかもそこは教育的にも買いたるものでも、また交通の上でも適度に便利な必要がある。それは一般的な自然環境の問題ではなく、勤め人や通学生がいる一般家庭にとっての環世界の問題である。昔よく言われた「孟母三遷の教え」なども、この範疇のことである。

④ 緑の木も毛虫がつかない木のほうがよく、秋の落ち葉に手のかからないことが望まれる。夏に木タルが飛んでくれたら最高だが、カヤハチはいてほしくない。人ひとが価値を与えるのは、そのように限定されたものに対してである。

⑤ そうなるとこのような人間にとって良い環境は、チョウとかトンボとかテントウムシ、小鳥などにとっては、決して良い環境ではない。このような動物たちにとってこの場所は、自分たちの環境を構築しえない環境であろう。われわれが何気なく「環境」ということををくちにするとき、そこにはつねにこのような環世界の問題が関わっているのである。

日高敏隆『動物と人間の世界認識』二〇〇三・一一

【要約トレーニング】

- ① 文章全体を読む。
- ② 全体を三つの段落に分け、三つの段落それぞれの役割を考える。
- ③ 三段落それぞれの中で重要な一文に線を引く。
- ④ 文章全体の中で最も重要な一文に二重線を引く。
- ⑤ 文章全体を百字で要約する。

100	75	50	25																		